
灰色の星

たけ10005

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

灰色の星

【Zコード】

Z0707F

【作者名】

たけ10005

【あらすじ】

ケンタウルス族の王子、ゼイオンに平民の歌姫、ローラは一目ぼれをしてしまった。しかし、そのときケンタウルス族は人類より優れていることを理由に人類制圧をもくろんでいて一触即発の状態だった。しかし、ゼイオンは国交の折に湖で一人歌っているローラの歌声を聞いて以来、お忍びで聞きに行くようになりいつしか2人の間に愛が芽生えた。この後の悲劇はわかりきっていたのに…。文章長いと感じたら、各章前書きに最低限の説明があるので参考にしてくださいませ。前書きでは伏線なし。素人なので、エラーがありま

すが氣にしないでください

歌姫ローラ（前書き）

街の小さなバーのステージの歌姫には、秘密がありました。誰もが知っていますが

私は。

私は、貴方に振り向かれずとも永遠に想い続けましょう

私は、たとえ種族はおろか、身分すらも違えど追い続けましょう

私は、いずれは貴方と同じ場所へ、同じ日の高さへと昇つていきましょう

私は、必ず貴方にとって必要な存在になります

たとえそれが、かなわぬ願いとしても

たとえそれが、許されぬこととしても

たとえそれが、幾多の困難に見舞われることになるとしても

たとえそれが、この身を滅ぼすことになるとしても

私は、話をしながら歩いている時や待ち合わせの時、目が合った時のあなたの微笑が好き

手と手が触れ合った時、そっと寄り添った時の安心感が好き
身体を重ねあう時よりも、唇を重ねる時よりも、手と手を握り合つて、息がかかるくらいに近づいた時、手のひらからお互いの全身を感じあえるとき、この世にたつた一人だけが存在しているかのようにさえ思える瞬間が好き

男と女の関係だけが恋じやない。同じ生き物として、敬愛し合える仲の上に男女の恋が芽生えた時こそ、本当の“恋愛”が始まる

- - - - 灰色の星 - - - -

「おい、聞いたか。ローラちゃんの噂」

「ああ、ケンタウルス族の王子とできるんだってな」

小さなバーのステージで歌を歌つている時にそんな話が聞こえてくるようになったのは、ここ最近のことだった。

「応援したいけど、もしものことがあつたらどうする気なんだろうな何年か前、村の美女コンテスト優勝したときは将来楽しみだつたが・・・」

うんうんとうなずきながら、テーブルを囲んでいる人たちの元に、一人の酔っ払いが怒鳴り込んでいった。

「お前ら、歌くらい静かに聞けよ」

それを受けたお客さんたちが、悲しみとも驚きともつかない顔でたしなめた。

「おいおい、落ち着いてくれ。悪かつたよ」

「ちくしょう」

ファン達の何人かが机を叩き、飛び出していき、頭を抱える。今まで沈んでいたけれど、今日初めて気にかけていたことが起つてしまつた。最後の理性とばかりに、その場に残つた人たちが静まり返つた。

歌い終わると、すぐに中心になつたところに行つた。

「ごめんなさい、私のせいで」

「いいんだよ、どうにもならないわ。ただ、面倒にまで発展しなければ良いのだが」

お客様たちは、苦笑しながら答えた。最近はすっかりよそよそしくなつてしまい、オーナーにも迷惑をかけてしまつてゐる。

オーナーが中に入ってきた。

「ローラちゃん、すまないが、これ以上面倒が起るとお互いに良くないし、今日で最後にしてくれないか」

いつかは来ると思つてた。

「あ、いえ。気にしないで下さい。いままで、ありがとございました。」

マスターはポケットを探つて青い宝石一つだけついている、シンプルなネックレスを取り出した。

「退職金代わりといつちやアレだが、これをもらつてくれ」

「そんな、悪いです。私のせいでこんなことになつたのに」

「いいんだ、こいつから言に出したことだし、ローラちゃんが遠慮することは無い。これは強く願うと災いから身を守ってくれるらしい。今のローラちゃんには必要だろ?」

「ありがとうございます。大切にします」

家の前で母子が歩いていた。

「ここの人たち、悪い人なんでしょう」

子どもがそういうと、母親が止める。

「そんなこと言っちゃいけません! 聞こえたらビックリするのー?」

家に帰ると、暗さがにじみ出でている。

「ただいま」

月光に照らされて黒く塗りつぶされた顔が一つ、向かい当たつて俯いていた。

「お帰り」

ほぼ同時に声がする。父は職を失つて数日になり、飲んだくれるわけでもなく温かく迎えてくれる。

「あれ、どうしたのそのネックレス」

「うん、今日お店でこたげたしちゃって、止めることにしたの。そしたらオーナーがくれた」

一人は押し黙る。父が深刻そうな顔をしながら、一人とも聞いてくれという。

「万が一の時、私は。

巻き込まれないよう口ーラだけでも逃がす場所を確保するべきだ」

「でも、どうやって?」

母が質問する。

「だから、それを相談するんだよ」

「私は逃げたくない。みんなを残して、一人だけ逃げるなんて嫌」

ローラは部屋に閉じこもる。一人とも何も言わない。何か言ってよ。

私が、どうしたら良いの? ゼイオンの絵を見ながら問う。

「ひみつはねる。」
ローラは一人、じぶん。

愛の行方（前書き）

酒場を首になつたローラの行く末は！？
現実はすさまじい勢いで迫つてくる

愛の行方

暖かい風に吹かれ、草花がゆらゆらと揺れている。

木々はささやき、鳥は歌い、そこはまるで楽園のよう。

私の唯一の心の支えが、今では幸福を称える贊歌となつていて。「ゼイオン様、早くいらっしゃらないのかしら」愛する人の名を呼ぶ。ただそれだけで、泉に妖精が舞い降りたように幸福という名の波紋が私の体をやさしく走り、包み込んでくれる。

数日前は、愛してはいけない人を思い、心の涙を声に変えて一人唄つていた。数ヶ月前は、貧困生活を送るすべての人々の支えになれるよう練習を重ねていた。

数年前は、とてもすばらしい楽園を見つけ、お気に入りの歌を口ずさんでいた。

この森とともに生き、この森とともに笑い、悲しいときは大木の根元で泣いていた。

そして今は私の恋の舞台となり、この泉の前のステージに立つ私の唄を、草花に囲まれたゼイオン様が静かに微笑んで聞いてくださる。

「ね、チッチ。今日は太陽が一番上に来る前にいらっしゃるかしら。昨日なんて、太陽が沈んでもいらっしゃらなかつたから、寒くなつて震えてたのよ?」

「チュンッ」

まるで私を元気付けてくれるかのようにタイミング良く鳴くチッチ。いつのまにか私の肩が特等席になつた、青い体に澄んだ瞳の小鳥。

「ふふつでもね、月光が泉に移つて、綺麗だからもう少し居ようかなつて思つてた時にいつのまにか隣に座つて私を見てたのよ。私ビックリしちゃつた。しかもそのとき、なんて言つたと思つ?」「チュン」

ステップを踏むようにせわしなく動き、小首をかしげるチッチ。

「月光に染められたローラの横顔を見たかつたんだ、だつて。笑つちやうでしょ？あんまりにも恥ずかしくて、つい俯いちゃつた」

「ちょっとゼイオン様の顔を真似してみる。実際には笑いをこらえ

るだけで精一杯で、かなり変な顔になつてるかもしねない。

「そしたらね、もし前日に夜来ると言つたら綺麗に青く染まるはずの顔が赤面して紫っぽくなつて、不自然な笑みを浮かべるだらうつて言つのよ」

チッチに手をかざし、手のひらに移動させる。

「せつかく一言いつてやろうとおもつたのに、先を越されただけじやなくて笑われたのよ？もう。そんなに顔赤くなつてるかな」

「チチチ……」

全て言い終わる前に、回れ右をして飛び去つていいくチッチ。

「どうやら俺が来ると行つてしまふのだな、あの鳥は

自嘲氣味に、でもはつきりした口調でつぶやく。

「ゼ……ゼイオン様！」さつきの話を聞かれてしまつたのかしら？本当にこの人は嫌なタイミングで来る。

「おやおや、ローラまで俺が来るのが都合に悪かつたのか」

わざとらしくやれやれと手を上げ、小首をかしげる。

「そ、そんなことありません。早く来て下さつてうれしいです。本当に」

まるで初めて舞台に上がつた役者の卵のよつ。今にも後ずさりしそうな足を必死で止めようと地面を踏みしめる格好がなおさら変になり、それを見て笑うゼイオン様。

「も、もう知りません！ゼイオン様なんて嫌い」

後ろを向き、泉に映つた私の顔を確認する。大丈夫だ、ちゃんと怒つてゐる。

「おいおい、冗談だよ。機嫌を直してくれローラ。せつかくの綺麗な顔が台無しだぞ？君に会いたくて來たのに後ろを向いちゃ見えないじやないか」

「お、怒ってなんかいません！……っ」

なんとか出そうになつた言葉を飲み込む。ここで私も……なんていつた日には、完敗じやない。

嫌な人。いつも人より先を行つて、自信たっぷりで、私なんて専属の歌手か何かとしか見てないんだわ。

いつも人の心を見透かしてゐるような態度で……私のことも、わかつてくれてるつてことなんだけど。やさしくして欲しいときはやさしくしてくれて、寂しいときはずっと肩を抱いてくれて……いつもじらしてばかりで……意地悪……でも、大好き。

「くうつ……！」

いつもの場所に移動しようと数歩歩いたところでゼイオン様がいきなり私をつかみ、振り回そうとして倒れんできた。

「やつ？」

突然のことで少し背中を打つてしまつた。頭は大きな手が下敷きになつてそんなに痛くない。

衝撃が和らぐまでどうしていいかわからず目をつぶつたままだつたことに気がつき、恐る恐る目を開けてみる。

ゼイオン様の顔がすぐそこにあり、一瞬のけぞりつとしても押し倒されて動けない。

ただ、何かが違つていた。

そう……なにかが。

「ゼイオン様？」

その人の名を呼ぶと、びくりと体が動いた。顔はやや微笑んでいるものの、眉はハの字になつてゐる。

「どうなさつたのですか」

そういうて頬をなでようと手を伸ばしたとき、それは見えた。

太陽を、光を両断する黒い影。

それは、天高く聳え立つ巨頭のよう。

それは、光すらも断ち切らんとする漆黒の黒。

それは、全てを飲み込む闇。

その先にあるもの。それは、羽。

それは、天空を飛ぶ鳥の体。

それは、軽くて柔らかな私の好きなもの。

それは、風を切る刃。

羽と黒く長い影。それが示すものは、今この状況では一つしかなかつた。

ありえない。そんなはずは無い。何かの間違いよ。

「ねえ、ゼイオン様：嘘だといつて？」

何も言つてくれない。いつもなら、笑つてごまかしてくれるのに。

「お願い、笑つてよ……ねえつたら！」

もう、何がどうなつてゐるのかわからない。やせしきあの人々の頬にそえたはずの手が、今は壊れたおもちゃを振り回して泣き叫ぶ子どものようにただ頭をつかんで揺すり続けるしか出来なかつた。

ピチャーン……

あるはずの無い音がした。ありえない。これは土の上だもの。土の上？何故土に落ちた零と分かるの？

そうだ、泉に雨の零が落ちただけかもしない。

空はこんなに晴れてるのに？

きっと、小動物が飛び込んだんだ。

下敷きにされたままの左手に触れているものはなに。

この暖かい水のような感触はなに。

なに？なんなの……

「ねえっ、答えてえ！」

空気を切り裂く音がした。

すぐ横を弓矢がかすめる。

弓矢。あの人気が得意だった武器。

そして……あの人を貫いた悪魔。

……た。だつた。だつたつて、なに完結させてゐるの？

「そんな男に会いに行くなどいつただろう……」

お父さん？どうしてここに。

「貴方たちには悪いけど、かなわぬ恋だつたのよ
お母さんまで。

どうして、どうして……

何が悪かつたというの。私がこの人に恋をしたから?
この人と私が出会つてしまつたから?

「どうして? 何でいつも私を置いて行つちやうの、なぜいつもそばに置いておいてくれないの。こんなときばかりこんなにすぐ近くにいて。でも、もう触れても微笑んでくれなくて……」

惨めよ。許せない。こうして私を置いてつとめとつてしまつた人も、私たちをこんな窮地に追い込む國も。

涙が出てくる。止まらない……

「ねえ、どうして。どうしてなのよー!」

目も開けられないほど光が差し込む。

暖かく、やさしい、太陽。

「夢?」

ゼイオン様が来て下さつて、からかわれたところまでは昨日實際にあつたことだつた。

今はただ、この光が全てを物語つてくれる。かわらずつ包み込んでくれる祝福の光。異国では神として崇められているもの。

「ローラー!」

大きな音を立ててお母さんが血相を変えて駆けつけてくる。その後ろに、不安そうなお父さんが顔を覗かせる。

「あ、なんでもないから。気にしないで」

「なんでもないって、貴方。また、あの人夢を見たのね」

そう、ここ最近ずっとだつた。私たちの仲が噂となつて広まり、それはやがて確信へと変わつていつた両国が下した判決は、戦争だつた。

引き金を引いたのは、私たち。そして、その罪を背負わなければいけないのも私たち。

誰も応援なんてしてくれない。孤独な戦争。これもまた闘いなん

だ。

ローラは、何も言えずに言葉を捲す。

「もう別れりといつただろ?」

「お父さん、もう別れたといひでビリにもならなによ
すかさずお母さんも応戦する。

「だからって、そのまま悪夢につながるつもりかい」

ローラは口を尖らせる

「もう、やめよう。無意味だよ、こんな議論」

そして決まって、お互に俯いて食卓へと移動するのが日課になつてしまつた。

いざれは変わるかもしない。2人の中のどちらかが死ぬか、どちらかの国が滅びるか、降伏すれば。

でも、きっとあの人人が何とかしてくれる。誰よりも先をいつて、誰よりも強いあの人人が。

森についてあたりを見回しても、誰もいない。あの泉水のほうにいるのかしら。

やつぱりいない。きっと、まだ忙しいのよ。今日は聞いて欲しいこといつぱいあるんだから、きっと来てくれる。

最初にきた時はまだ日が昇る前だったのに、もう夕日があたりを赤く染めていた。

「綺麗だね、チッチ。あの人にも見せてあげたいわ。また何か企んでるのかしら?」

そういうと、今朝の夢を思い出した。昨日の夜、やつと来てくれたゼイオン様の実際の言動の夢を見ていたはずなのに、途中から殺されてしまう夢。

今はもう、夕日が真っ赤な血に見え、血に染まつた泉が風によつて悲しく波打つていた。それは、終焉を迎えた静かな鎮魂歌のようだ、かすかな木々や動物のわたやきが、鳴き声を必死に隠そうとしているようで身震いした。

もしかしたら。そんな、けして否定できない予感がよぎる。遠くから見ていただけの日々、いつまでも幸せになれると信じることが出来たあの日、全てが幻影のように思え、静かに闇が蝕んでいった。

月光に照らされ、モノクロームの世界でただ一人待ちつづける私の姿は、ゼイオン様の望んだ姿なのでしょうか？こんな私を見るために、待たせていたわけではないですね。でも、少し不安になります。早く、できるだけ早く来て下さい。そうでないと、ゼイオン様を信じつづけることができないから。

乾いた、枝の断末魔がかすかに聞こえた。

「ゼイオン様

やつと来てくれた。そつ思つて振り向いても、誰も出でてくれない。

わずかに感じたような気がした視線はなんだつたのだろう。そう考えた時、暗殺という不吉な言葉が脳裏をよぎつた。お願ひ、助けに来てくださいといいそうになり、頭をふる。もしそれで来てくれるとしても、万が一のことがあつたら。

逃げなくちや。とにかく、それだけを考えて懸命に走った。

激突（前書き）

夢にひなされるローラ。しかし、現実はすさまじい勢いで迫っていく
る

「ローラー！ 伏せろお！ この、化け物があ！」

護衛の一人が、無理矢理ローラを押し倒して、弾みで転げながらデタラメに『』を放つ。

「グオ！」

誰の声かわからない。野太い声が、飛び交い、俊^{はし}り、交わる。怖い！ でも！ ここから逃げなきや、たくさんの人人が死ぬ。ローラはきびすを返し、木の裏をつたい、徐々に間合いを広める。

「ローラー！」

聞いたことのある声。ここには来ないかもしぬないと思った声。「ゼイオン様！」

危ういところをゼイオンに助けられる。

「無傷か、よかつた。闘つてるのは誰だ？」 「私たちを応援して、私をここまで連れてきてくれた人。助けてあげて！」

ゼイオンは一瞬近衛兵に笑いかけ、走る

「皆さん、ご迷惑をおかけした！」

ゼイオンは絶対当たらない距離のところに『』を放ち、ケンタウルス達を威嚇した。

「貴様ら！ 』を退け！」

「なりませぬ、ゼイオン様！ このものたちとは敵対関係です！ 人間の女などに惑わされず、私どもの御前に！」

ケンタウルス軍は構えだけをして、戦闘を中止。戦いに不慣れなローラ親衛隊も『』をしまづ。

「すまない、みんな。。。ローラー！ 泣くな！ 泣くのは戦争が終わつてからだ！」

精神的にこたえているローラを抱きしめて活を入れ、静める。

「俺はこれから戦闘を静める為最前線へ行く。俺に乗れ！ そのほうが安全だ」

「はい、皆さん、逃げてください。ケンタウルス軍のかたがた、ここは退いてはいただけませんか！？私の大切な人たちを、これ以上失いたくないんです！」

「ゼイオン様！… つく！… 皆の者、退くぞ！人間は捕虜にして丁重に城にご案内しろ！」

「はつ！」

ケンタウルス軍の面々は、隊長の指揮のもと退陣。親衛隊も、自らの宿命をゼイオンに託して武装解除した。

終戦（前書き）

ローランドゼイドオンの未来は！？

世界平和は訪れるのか？

兵士達を説得する為、ケンタウルス軍の將軍に会いに行く。

「將軍、私だ。すぐさま武装解除して、戦争をやめさせろー…これは私たち二人の問題だ。國家を動かすのは止めさせるんだ！」

「なりません。王が決めたことです。一兵士である私の出る幕ではありません。お言葉ですがゼイオン様…やはり人間とケンタウルスでは住む場所も生活も違うのです。歳をとつてから後悔しては遅いのです。どうか、お引きを！」

「もはや若氣の至りとは思い知った。だが、しかし誰かが動かなくては、にらみ合いは続く。遅かれ早かれ、こうなるのではないか？ならば、かすかな可能性に賭けてみたかったのだ」

將軍は、軽くため息をつき、うつむく。

「私には、家族がいます。しかし、子供は人間が嫌いだといいます。他人を簡単に陥れ、だまし、殺すから。鬼人のごとき存在、とさえ」
「すべての人がそうではない。影があるということは、光があると」とさえた。影を照らし、最小限の影で済ます。そんな世界が作れるはずだ

「將軍は、今度こそはっきりため息をつき、気を取り直す。

「まったく、あなたという人は…とにかく、ここから脱出してください。私は何も見てない、聞いてない」

人間とケンタウルスの追っ手が来た。

「ローラ、お前だけでも逃げる。俺が足止めをする

「しかし、ゼイオン様…」

ローラは懇願するように、抱きつく。

「いけい、ローラ！ これは命令だ！」

ローラは、一瞬恐れおののき、それでも食い下がろうとするが、

ゼイオンの目を見て反論をあきらめた。

「皆の者、止まれい！」

「みんなさい、ゼイオン様。」

ローラはさうに遠くに走つて逃げ出す。そこには最大の罠があるとは知らず……

「ローラとやらば、そなたかえ？」

走りつかれ、とぼとぼと歩いているローラに、見知らぬ老女が話しかける。

「はい、私がローラです。あなたは？」

さすがに、こんな老女が敵とは思わず、キヨトンとして尋ねる。「わしは名も無き老人じや。…と、いつかボケて、名など忘れた。ヒエッヒエッ」

不気味な笑い声、ナンセンスなギャグ・・・これは大変な人に絡まれたと、ローラはお辞儀だけして走り去りうとした。

「までまで、見るところに、そのネックレス、かなりの上物じやな。少々わしにも見せたもれ」

店長がくれたネックレス…思い出を捨てきれず着けていたけど、ゼイオン様はそれどころじやなかつたな…せめて、この人にだけでも見てほしい。ゼイオン様とは、もう会えないかもしれない。戦争が始まつたのだから。・。

ローラは老女にネックレスを見せた。

「ちょっと触らせてくれんかの？はずしてくれるかえ？」

ローラは一瞬躊躇したが、まさか持つて走つて逃げるわけでも無し、追いつけないわけでもなさそうだ。と、女直に考えて差し出す。

「ほお、良い物じやのぉ…ストーン！」
「きやつ！？」

ローラの足に向け、老女は手を伸ばして魔法を放つ。魔女。まさか本当に存在したなんて。

なんの感触もなく、神経が途切れていくよつに全身の感覚がなくなつて來た。

・・・石化・・・

「ゼイオン様あ！」

「ローラ、無事なのか？ローラア！」

良かつた。ゼイオン様だけでも無事で。

ゼイオン様、最後に一つだけお願ひ、いいですか？貴方が私の元に来てくれた時は冷たいかもしれないけど、もう女の形をしたものでしかないかもしれないけど、思いっきり抱きしめてください。この数日間、ずっとそれだけを願いつづけてきたのです。

「ローラ……なんてことだ、まだ何も解決してないのだぞ。まだ、何も終わってないじゃないか。元に戻つてくれ」

そういうと、ゼイオン様はもうほとんど石になつた身体を抱き寄せてくれた。何も感じなかつたはずの身体が、確かに暖かさに包まれていく。

「ポタ……ローラのほおに、水滴がひとつしづく……
もう、笑うこともできていなかもしれないけれど、きっと私の気持ちも伝わつてくれていますよね。愛しています、いつまでも。それだけを支えにしてきました。」

薄れ行く意識の中で、ゼイオン様の顔が近づいてきた。良かつた。伝わつたんだ。答える変わりにくれた唇が最後の記憶になつたことを幸せに思います。だって、最後の最後まで貴方を感じられたんだから。

「貴様、噂に聞く魔女か！？存在したなんて、王の差し金か！？」
「そなたは、噂のゼイオン殿かえ？やはり若いのぉ……いかにも、わ
しはケンタウルス軍の王に代わられて少女を石化した。そして、王子
も…ストーン！」

再び魔女は呪文を唱えると、ゼイオンは危険を察知して後ろへと身を退く。

「貴様の視線に入りさえしなければあー！」

ゼイオンは真っ先に魔女に突進し、頭を飛び越え後ろに回り、懇親の足蹴りを食らわそうとする。

「なんの！わしは魔女、能力を人間以上に上げるなど、どうせも無いこと！観念して降伏せい！王には石化しろと命を受けている。この少女とともに散れい！」

魔女は話しながら前に飛び、半ひねりでゼイオンのほうを向くと、空中で呪文を唱える。

「ファイヤー！」

業火がゼイオンを襲う。避けようとするが突然の、いやそれ以上に予想しえない体術の前になすすべも無く、焼かれる。

「ぐおうー！」

しかし、致命傷には値しない。確か魔女は、石化すると言つた。ならば、そこにこそ勝機はある。

すばやく背中に背負つた弓を構え、着地地点に矢を放つ。当然、魔女はよけるだろう。しかし、とんだ反動で横に跳ぼうものなら、次の一矢でバランスを崩して倒れる。そして、バックすればその予想地点に矢を放つて射殺すことができる。

「そこだ！」

決まった！そう思つたとき、魔女は呪文を唱える。

「シールド！甘いわ若造が！そなたが何もしないと予想すると思つてか！？わしを見くびるな！」

「ちい！…なぜさつき石化ではなく炎の魔法を使つたのだ？」

「久しぶりの強者…少々興味を抱いてのお」

完全にこちらを見下しているつて訳か。なされるがままなのも今

のうちだ。

魔女の弱点はわかつた。呪文は一つ同時に使えない。なぜなら、できるならシールドとともに石化もできたからだ。矢を放つている間動いたら、起動がずれる。こちらの動きを先読みできる戦闘のスペシャリストが、そこを狙わないはずは無い。威嚇として、矢を連射する。

「どうした！？防御するだけか？ならばこちらから！」

ゼイオンはまた突進すると、シールドの上から蹴り飛ばす。激痛

が走る。

「…っ！」

二人は同時にはじけとび、倒れる。まさかシールドに触るとはじけ飛ばされるとは。

馬の体とは不自由なもので、倒れると人間より起き上がるのが遅い。コンマ一秒の遅れが、お互いどちらかの負けにつながる。

「これで最後だ！」

ゼイオンは、倒れたまま懇親の矢を放つた。起き上がる暇は無いと判断。態勢を立て直す前に横たわったまま矢を放つたのだった。これにはシールドの唱文時間は間に合わない！

「ウインド！」

ゼイオンの矢は外れた。魔女の腕をかすつただけだ。シールドでなくウインドを使ったのは、頭ではない。もはや脊髄反射だ！幾多の戦い、試練修行を経験しただけの神業である。

魔女は、ゼイオンの武器は矢しか無いことを知っていたから、風を起こして軌道をずらした。魔女の方腕に激痛が走る。

「ぐう！ やるねえ、若造！ しかし！ ストーン！」

ゼイオンはかるうじて起き上がりつて回避。次の一撃でしとめようと構える。

「ストーン！」

「なに！？」

一発目の連續魔法。同種とはいって、普通術式に時間がかかり、間には数秒の時間が必要な魔法をコンマ単位でやつてのけた。ケンタウルス王、フランツの認めた大魔女のみができる離れ業だ。同時にないが、回避地点を読んだのだ。

ゼイオンは及ばず、石にされる。

「これが、あの一人ですか」

将軍は、魔女に問う。

「いかにも。こうとなつては、もはや一人を蘇らせる」とはできません

「それは…きれいな宝石のネックレスですね」

魔女の手元にあるネックレスを指差し、將軍は問いかける。

「対魔石じゃ。これをもつているものには、いかなる魔法も無効化される。ローラとかいう少女が持つてたものじゃ」

「それを身につかせると、治るのですか？」

魔女は頭を振る。

「こやつらはもう死んどる」

將軍は、一人を見る。まるで、今にも動きそうだ。
「もうしわけないが、それを譲ってくれませんか？この娘にかけてやりたい」

魔女は、少し考えたが、まさか自分が魔法で殺されることは無い。
持つていても無駄だ。そう判断し、將軍に渡す。

將軍は、ローラの首にネックレスをかける。

「どうか、安らかに眠ってくれ」

將軍は、ローラの目から、涙が流れた気がした。

「疲れてるみたいだな。それでは、帰ります。ご苦労様でした」
2人の石は隣同士に置かれた。

夜が更けると、ネックレスが光る。

すると、驚くべきことにローラの体が光り、元に戻る。

「ゼイオン様！…これは…？ああ…ゼイオン様…石にされてしまつたので…」

ローラの体が重くなる。ネックレスの光が弱まつていく。

「ゼイオン様！」

ローラはゼイオンの首に手を回し、抱きつく。

光が、はじけた。ネックレスは砕け、ローラの体は再び石に。

翌日、両軍は、二人の石を回収するため、二人の石の前に立つた。

しかし、そこにあるのは一人の抱き合つている石。ありえない。

將軍と魔女は同時に思った。

「ばかな！？ネックレスは生きている時のみ効果を發揮する！生き続けていたのかや！？わしが使つた魔法が不完全だとでも…？否！？」

「これは意志の力だ！奇跡だ！」

朝、魔女はケンタウルス軍の兵たちを呼び出し、事のてんまつを告げた。

「これはきっと、全知全能の神ゼウス様の御心である！皆のもの、直ちに戦争をやめ！これは命令じゃ！」

ケンタウルス軍は動搖する。

「な！？何の権限があつてそうする…？」

「渴つ！」

魔女は一喝する。もともと両軍に利益の無い戦争だつた。

「だまらんしやい！わしの言うことが聞けぬのか！？」

ゼイオンを倒した魔女に口を挟めるものなどいなかつた。

西洋の魔女とうたわれた魔女に圧倒され、王も神ゼウスを恐れて終戦へ…

号外”ケンタウルス軍は休戦を要請。平和条約を結んだ。理由は。。。

「かわいそうですね。とある軍曹が少尉に呴いた。

少尉は鞭で威嚇し、軍曹は固く目をつぶる。…しかし、一撃は来なかつた。軍曹は少尉を上目遣いに見やつた。

少尉の目には涙があふれ、空を仰ぐ。人、だからだと人類は言うかもしれない。しかし、ケンタウルスもまた泣いている。

「そういつた一言で済ますな、軍曹。貴様は若すぎる。奇跡。それが一人へ送れる唯一の手向けだ。一人はきっと幸せさ。永遠にそのままの姿で、そばにいられるのだからな」

「彼らは希望の星だ！灰色の星だ！」

皆で喝采し、その像と話は語り継がれた。

もちろん人類とケンタウルス国の人間の一人が出会つた森に祭られた。湖の前。きっとまた動き出して、微笑みあう日が来るから。

ローマの広場には、ケンタウルスと人の像が立つていて。ローラとゼイオンの悲劇の像が、数千年たつた今でも残っている。

からだ。けつして風化せず、動かず。永遠の愛を歌う。

「おじいちゃん、あれは何なの？」

「あれはのう . . . 舊話の石造じや。話では、人類は様々な妖精や
獸と住んだ時代があるという。ホントかのう . . . ?」

「本当だよ、きっと！人はみんなやさしいから！」

無邪気な子供。大人というのは残酷だ。しかし、無垢な少年が育
つ世の中は捨てたもんではないな…と思つ老人であった。

終戦（後書き）

最後までお読みいただき、ありがとうございます！今日は初のファンタジー！原案は5年ほど前に考え、最近肉付けしてこのたび、日の目を見ました。もつとも、5年間何の執筆活動もしてませんでしたが、

最後の最後でバグ直すやつ方わかつたかも。でありますか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0707f/>

灰色の星

2011年1月14日03時58分発行